

報 告

ペルソナ、伝統的仮面の象徴的意味と
箱庭における顔的表現

岡 田 康 伸・名 取 琢 自

本報告は、2013年8月1日から5日にかけて、イタリア・ヴェネツィアで開催された国際箱庭療学会（ISST: International Society for Sandplay Therapy）・第22回大会における岡田・名取による講演“Persona, Symbolic Meanings of Traditional Masks, and Face-like Expressions in Sandplay”（2013年8月2日）の英語原稿をもとに、内容の一部を日本語で再録し、報告としてまとめたものである。

大会のテーマは仮面をまとったカーニバルで有名な開催地ヴェネツィアにふさわしく、「仮面－変動する世界において隠れては現れる劇－」（“The Mask: The play of hiding or revealing in a changing world”）であった。会場はベネツィアの小島、サン・セルボロ（San Servolo）のセミナー施設が確保され、潮風と灼熱の太陽のもとで、世界中から箱庭療法家が集い、2年に1回の国際大会は盛況となった。この小島はかつて療養所や精神病院として利用

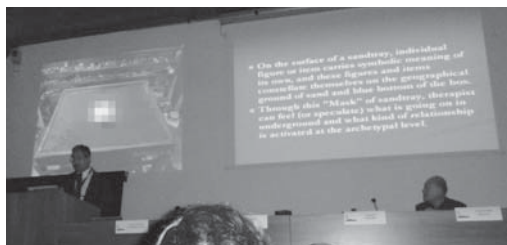
された歴史があり、現在のセミナー施設は病棟跡地を再整備してできたものである。旧精神病棟の一部は博物館として保存され、当時の治療用具や治療方法に関する資料が展示されている。

会期中には、ヴェネツィア本島でビエンナーレも開催されており、ビエンナーレ会場では奇しくもユングの『赤の書』が展示されていた。公刊に貢献したソヌ・シャムダサーニ氏もイタリアを訪れ、国際箱庭の大会にも参加された。

岡田・名取による講演は大会初日の全体プログラム、前会長のルース・アンマン氏の講演に次ぐ二番目の演題として、1時間の時間枠で行った。イタリア語圏での開催であることも配慮して、スクリーンを二画面使用し、一つは画像、一つは英語原稿を順次提示しながらの発表となった。



(写真1 San Servolo 会場入口)



(写真2 岡田・名取発表の様子)

以下に発表内容の一部を日本語で報告する。ただし、臨床事例の詳細については割愛したことをお断りしておく。

I ペルソナと伝統的仮面の象徴的意味 (岡田康伸)

「仮面」がテーマとして取り上げられた国際箱庭療法学会 (ISST) の第 22 回大会で、名取氏とともに発表することができて、うれしく思います。

まず、日本語における "mask" について一言触れておきます。仮面を表す言葉に、日本語では、「仮面」と「面 (おもて)」があります。仮面は「面 (おもて)」に仮 (かり) のものを被ることをいいます。すなわち、面を仮りのもので隠すことになります。それに対して面は、そのまま素の顔を示していることになります。しかし、素で (そのまま) 面 (おもて) を出していますが、逆にその面 (おもて) の「裏しろ」に何かあることを暗示しているように、私は考えます。すなわち、「表」を上から隠すか、表を素のまま出して、裏に何かあることを暗示していると考えerのです。どちらも「仮面」を示す日本語であることを一言触れておきます。

私が「仮面」に関心をもった経緯を話すことによって、仮面への考察をしたいと思います。それが、皆さんが仮面について考えられる手助けに少しでもなれば幸いです。

私が仮面に関心をもった経緯には、4つの背景があります。ひとつは、ユング心理学の概念のひとつであるペルソナです。二つ目には、人類学的な面から、国々の仮面に関心をもっていたことです。3つ目には、日本の伝統的な能に関心をもち、謡曲を少し習い、能面作りを少し試みたりしたことです。四つ目は、臨床心理士の養成・訓練のために、これは箱庭療法士の養成・訓練とも重なりますが、仮面作りをしていることです。

それぞれについて、説明していきたいと思います。

1. ペルソナについて：

ユング心理学では、ペルソナは個人と社会的環境が接する境界空間に形成されていると考えられています。これは、社会的役割を果たす時、その役割のペルソナを果たしているということです。例えば、大学の教授であれば、大学では教授としての役割を果たす時、教授としてのペルソナを果たしているといえます。その人が、家に帰れば子どもに対しては父親としての、また、奥さんに対しては、夫としての役割を果たします。このように、その場に応じて様々な役割を、すなわちペルソナを果たすのです。これらを「それぞれの場に応じての仮面をかぶっている」と言ってもよさそうです。その場に応じて仮面をかぶり、変えることができれば、スムーズに適応していることになります。しかし、ある役割に固執して、同じ仮面を被り続けていると、「鉄仮面」として、周りの人々に害を及ぼします。30 年ほど前になりますが、日本でのひとつの出来事を紹介します。それは「孫がベッドの祖父をバットで殴り殺した」事件です。この祖父は有名な大学の有名な教授でした。厳しい先生で、学生には怖がられていましたが、しかし、大学教授として慕われている所もありました。この祖父は家に帰っても大学と同じような振る舞いをしていました。「教授」のように父母や祖母を支配していて、家族の中での祖父としての役割を忘れていたのです。これに反発した孫が、祖父を殴り殺したのです。これは大学人としてのペルソナをそのまま家に持ち込んだために起こった悲劇でした。

また、ある聞いた非行少年の事例を紹介します。その 15 歳の男の子は、いつも笑いを顔面に浮かべていました。殴られたり、ひどい目にあった時も、笑っていたといえます。又、何か悪いことを考えた時なども、笑いが出てくる子でした。この子は、意思に反して、笑いを仮面

にしていたと言えます。

今日の日本は、父親の力が衰えてきていると言えます。第二次世界大戦前は、社会制度が、父親の威厳を支えていました。しかし、戦後、その制度が崩壊し、父親の威厳がなくなったのです。また、父親だけでなく、従来の母親の役割とは違うことが求められる母親も混乱しています。戦後、女性の社会進出がさかんになり、女性の生き方に変化が生じてきています。ところが、その生き方が確立されておらず、女性としての生き方と母親との生き方の間を揺れ動いています。言い換えれば、母親としてのペルソナが取れない母親が多くなっています。父親も、母親も、そのペルソナを失った人たちが増えているのです。社会現象としては、子どもへの虐待や家庭崩壊などに見られます。

ここで、「内的ペルソナ」という概念を提案したいと思います。今までの説明は、ユング心理学の「外界に対する」ペルソナでした。しかし、それと対応するように、「内的」ペルソナを考えてみたいのです。これは、自我の機能であるとみなして、問題にしない人もいるかもしれませんが、考察する意味はあるのではないかと考えます。

この考えを思いついた背景は、夢について考えていた時にあります。すなわち、夢には、夢を見たが「思い出せない」とか、「涙だけがこぼれていた」とか、「笑っていたと妻が言った」などの、夢の内容はわからないけれども、身体が反応していることが多々あります。この時、夢の内容を自我（ego）が記憶して、止め置かないと考えることもできますが、ここに、内的ペルソナが働いていて、夢の内容に対して何らかの選択をしていたのではと考えるのです。それは、検閲と言えるかもしれませんが、超自我の働きをもって来るよりも、その時々内的ペルソナが働いたためと考えるのです。外界に対

してペルソナが、その都度の役割をするように、内的な動きに対して、内的ペルソナが、何らかの働きをしているという考えです。少し乱暴かもしれませんが、考察に値するのではと考えます。

さらに一つ例をあげます。一般に人間は睡眠中の4分の1ないし3分の1の時間は夢を見ているといわれます。しかし、実際に夢を憶えている日もあれば、夢を見ていなかったと思う時もあります。生理的な指標では、実は夢を見ているのです。この時、「夢を見ていない」という思い（自我の働き）がありますが、実際は見ている。その＜見ていない＞という思いを出すのは、自我というのは関係なしに、夢を自我に憶えさせない何かが働いていると考えられます。この何かが、内的ペルソナと名付けられないかと考えています。

箱庭の制作をしているとき、内的ペルソナを考えたもうひとつの例をあげたいと思います。制作者が、無意識的に、動物のペアを置いているとします。制作者は気づきません。ところが、どの動物もペアになっている。偶然かもしれませんが、見守り手がそれを指摘すると、制作者は驚き、「気づかなかった」といいます。意識的には動物を置いているだけなのに、何故かペアになっていたのです。この時、意識、すなわち自我の働きではなく、それ以外の、無意識からの働きかけでペアにしていると思います。この動きを内的ペルソナと名づけたいのです。

2 人類学的な仮面について：

二つ目は人類学的な仮面です。私が集めた国は、ニューギニア、メキシコ、韓国と日本などです。これらは、ごてごてと装飾されているのが多いようです。仮面には、これを被ることによって、現世から神の国へ移ることができるようです。すなわち、変身ということが出来ます。

仮面には、動物の仮面が多いようです。その仮面を被って、例えば牛の仮面を被って、牛になるというようなものです。

また、山の頂上に神社が祭られている時、山の五合目の所に、小屋が建てられていて、そこに仮面が置かれています。村人が山の神社にお参りに行く時は、その小屋で仮面をつけ、そしてお参りする村もあります。その仮面を被ることで、日常生活から、ケガレを落とし、神聖、新鮮なものに変身してお参りすることになります。

3 能面について：

3つ目は能面です。私は能に関心がありました。元は、父が謡曲を習っていました。謡曲の先生が私の家に来られると、近所の仲間二人に私が知らせに行くのが常でした。先生は一週間に一度来ておられました。すると、謡曲が二時間ほど聞こえてきます。謡曲は馴染みになっていました。

日本人にとって、謡曲は、市民の教養としてなじみ深いものでした。

結婚した時、家内と謡曲を父に習うことにしました。家内も能に関心があったので、二人で何か学ぶことができました。2～3年で子どもができ、家内も忙しく、私も忙しくなり、自然にやめていました。ところが50歳前に、大学で、教授昇進の話がつぶれました。この時、少々腹が立ち、何か心を落ち着かせるものはないかと思い、謡曲のことを思い出しました。しかし、父は死去しており、謡曲の代わりになるものとして、能面作りを思いつきました。幸い、近くに、同級生のお父さんが能面作りを教えていると聞き、その人に習うことにしました。道具をそろえましたが、とりあえず、二～三本の彫刻刀を使いました。長方形の木の塊が与えられ、それに、線を引き、彫っていくのです。いわゆる一

木彫りで、表側から線に合わせて彫ります。ある所までくると、裏側をくり抜く感じで彫るという手順です。一週間に一回、一時間余り習っていました。先生なら、一日で仕上げられるのですが、半年位かかります。もちろん家で、少しずつできる範囲で彫っていました。掘り終わると次は、色塗りです。このようにして三～四個のお面を作りました。

彫っていると集中しますので、心が落ち着きます。能面ですので、見本があり、新しいものを彫るということではありません。

この作業を通して、「自分とは何か」を考えていたと思います。能面作りが、自分作り、すなわち、ペルソナ作りと平行していたと思います。残念ながら、作った能面は、探しましたが、見つからず、写真でお見せできないのです。

4 仮面作りについて：

4つ目は、仮面作りです。これはある人から教わったもので、その人はスイス人から教わったと言っていました。

スライドの写真にお見せしているようにして仮面を作ります。素材は、プラスランギプス®と言って、骨折した時などに使われる包帯です。石膏がついていて、それが接着剤になります。7cm×1cmの短冊に切ります。

まず、ペアを決め、作り役と作られ役を決めます。できたら、交代しますので、どちらも体験できます。

作り手は、短冊を相手の顔に貼ってゆきます。まず、顔の輪郭に、できるだけ、毛の生え際まで貼ります。そして、中へと貼っていきませんが、おでこはどちらかという横に、ほっぺたは縦に貼ります。短冊は少しずつ重ねておきます。そうでないと、顔からはがした時、崩れてしまいます。7cm×4cmぐらいの大きさに口と2つの目は残しておきます。最後に残された大きさ

に切って、口と目は1枚ずつで、仕上げます。

大切なことは、鼻の穴2つは開けておくことです。穴をふさぎますと、息ができなくなるおそれがあります。すると死んでしまいます。鼻の穴を分けている中心は忘れずに塗ることで

できあがると石膏が乾き、5分もすれば剥がれます。作り手は外から、縁をこじてあげ、中の作られ手は笑うか、しかめっ面をするなど、頬を動かします。睫毛が挟まれたりして、取る瞬間は痛いですが、産みの痛みと考えています。

これによって、死の仮面（death mask）ができます。鏡で自分の顔はよく見えていますが、写真で以外、目をつぶった顔は見たことがないでしょう。

顔全体を包帯で覆われ、死の体験をし、それが外されて、生まれ出る体験をしたことになります。また、仮面を作ってもらっている間、相手に任せる、すなわち受け入れられる体験でもあります。石膏が熱を帯びますので、暖かい気持ちよい体験もできます。

これによって、「相手に任せる」ことを体験します。また、死と再生のちょっとした体験でもあります。

自分のお面を見ることによって、日頃気づいていなかったことに気づきます。例えば、「日頃、自分はお母さんに似ていない」と思っていた女性が「作られた仮面がお母さんそっくり」と驚いていたことがあります。

以上、私的な体験をもとにして、4つの視点から、仮面について私論を述べました。仮面はこのように、個人個人にとって、何か不思議な、魅力的なテーマです。ここ、ヴェニスで、これをテーマにされたイタリア箱庭療法学会の皆様

Ⅱ 箱庭における顔的表現

（名取琢自）

ではここから、箱庭の「仮面」的構造について考察しながら、箱庭作品における顔のような表現の例を紹介したいと思います。

今回私はこの学会で始めて自分の発表をさせていただくことになり、その上、岡田先生との共同発表であることをとても光栄に思います。ヴェネツィアというきわめて繊細で洗練された芸術、文化の伝統のある場所で発表できることも喜びです。

箱庭療法においては、箱庭作品もまた、顔や仮面ともみなせます。砂箱の表面には、人形やアイテムがそれぞれの象徴的意味を担いつつ、砂と青い底面とが織りなす地形の上にある布置を形成します。この箱庭という「仮面」を通して、治療者は地下で何が進行しているのか、元型的レベルでどんな関係が活性化しつつあるのかを感じ取り、考えをめぐらすことができます。

岡田先生はたくさん仮面を紹介されたので、筆者の手元にあった資料から、日本の古い仮面をいくつか紹介します。これは縄文時代、現在からおよそ三千年前頃まで続いた古い文化に属するものです。仮面を被った人の頭部の像も見つかっていて、装着した様子もわかります。古代日本の仮面は素朴ですが、静かな迫力を感じさせるものです。

筆者が大会のテーマ「仮面」に接して、直ちに浮かんできた反応は「そう、箱庭も仮面である」という言葉でした。もう少し正確に言えば、箱庭と仮面には共通の構造がある、ということです。いずれも、可視的な表面と、不可視の、より深いいくつかの層からなっています。可視的な表面は一見「本当の」顔に見えますが、より深い層を隠しています。

・マスキング効果：

仮面という言葉と関係が深いのですが、「マスキング」効果は認知心理学ではよく知られています。強度の強い刺激や、新しい刺激が呈示されると、それよりも弱い刺激や、時間的に先行する刺激が、それに取って代わられてしまうことをいいます。時には、強いマスキング効果のため、先にあった刺激が見えなくなったり、認知できなくなったりします。

マスキング効果は町にも見られます。ある建物が取り壊されて、新しい建物が建てられると、以前の建物の外見を思い出すことがそう簡単ではなくなります。新開店の店は以前の店の記憶をマスクするのです。これと同様なことは、臨床の場での視覚的な表現にも起こります。表面に見えているものや、新しいものが、その奥にあるものや古いものを見えなくしてしまう現象は、まさに「仮面」的です。

・箱庭の「仮面」性：

役者が仮面を被っているとき、観客は役者が仮面を被っていること、本当の生きている顔が仮面の下に隠されていることを忘れていません。これは、仮面と役者の構造がはっきり見て取れるから可能なのです。

では、箱庭ではどうでしょうか？ 表面の可視的な層と、その下にある地形的な基礎、いわば「砂の風景」を見分けることは容易です。樹木、家、人物、動物の人形などが、箱庭の地面を覆っているかもしれません。でも、制作後にこれらを取り去って、基礎の地形を直接見ることは簡単にできます。砂の風景が、こうしたフィギュアで覆われた全体像と同じくらい、あるいはそれ以上に重要であることは、よく強調されます。ルース・アンマン先生（国際箱庭療法学会前会長・ユング派分析家）もよく言及されることです。

ですが、箱庭の仮面様の構造は、もっと複雑なようです。クライアントはよく、こんなふうには発言されます。「私はこんな場面を作りたかったんですが、イメージにぴったり合うおもちゃが見つからなくて」。箱庭は、クライアントのイメージと箱庭室のセッティング（フィギュア、砂、時間、等々）との妥協として作られるのです。

ということは、箱庭作品として見えているイメージは、クライアントの内的なイメージと違うかもしれない、ということです。なので、箱庭は、内的イメージの近似物とみなせます。そんな場合には、箱庭は、作ろうとしたイメージという、いわば真の顔を背後に隠す仮面であるともみなせます。

でも、この説明でもまだまだ単純に過ぎます。たとえ仮に箱庭がクライアントの内的イメージと全く同じ姿をしているとしても、さらに別の層（次元）のイメージーションや意味が隠されているかもしれません。

いったいなぜでしょうか。それは、箱庭の視覚的イメージには、メタファー的、象徴的な意味も含まれるからです。さらに、箱庭が、クライアントの無意識の中に存在しうるイメージーションを指し示すこともあるのです。

このことを手短かに解説するために、松尾芭蕉の有名な俳句をひとつ取り上げます。

「古池や 蛙飛びこむ 水の音」

この俳句の表面的なイメージは、古い池があって、蛙が一匹水の表面に飛び込むと、水の音が響いている、という光景でしょう。これだけでも美しいイメージですが、この句によって、時間と無時間性とか、存在と宇宙とか、生と死とか、孤独と尊厳といった、メタファー的な意味もたくさん開かれるのです。無数の深い意味が、この単純な一つの俳句から探究していけます。

さらに、作者にとっての深層心理学的な意味を問うこともできます。「作者は淋しかったのだろうか？ いや、彼には友人も仲間もたくさんいた。だから、自然の中で一人になりたかったのだ」、とか、「このイメージは彼の忙しい日常生活を補償しているのだ」、とか、いくらでも考えることができます。

箱庭にもたくさんの表現や意味の層があります。ここでいくつか、箱庭作品の例を紹介します。[事例資料のため詳細については割愛する]

この箱庭では、山の頂上に木が鋭く立っています。これがこの箱庭のいちばん表面的な意味でしょう。ではこの作品はどんな感情をかき立てますか？ 攻撃性、孤独感、他人に理解されることを拒否したい気持ちでしょうか。たくさん可能性があります。

では、この箱庭はどんなメタファーの意味を開いてくるのでしょうか。クライアントはこの山のように、鋭い木を突き立てられているのでしょうか。あるいは。この箱庭は、問いかけや宣言として、「こんな表現でもまだ受け入れることができますか？」という疑問とか、「そんな簡単には私を見せたくありません」というメッセージかもしれません。やはり様々な可能性があります。

・顔のような箱庭表現：

また、地形に目のような構造が表現された箱庭もあります。一見すると楕円形の水面のなかに、小島があるような表現なのですが、アイテムを取り除くと、瞳と目のイメージが浮かび上がってきます。箱庭からこちらに向けられた眼差しのようにも見えます。

こういう箱庭表現は、複数の層をなして存在する意味をはっきりと示してくれています。表面のイメージ、感情、クライアントの内的状態に関するイマジネーション、そして、クライエ

ントがセラピストに伝えたいと思うだろうメッセージなど、様々です。

結局のところ、箱庭の背後にある、隠れた生きた顔にむかってアプローチするのは、単純な仕事ではない、ということです。

また、こんな箱庭もあります。公園なのですが、アイテムはまるで顔のように配置されています。アイテムを取り除くと、くぼんだ地形は仮面のようにも見えます。

また別の方の作品です。やはり「仮面」のモチーフを思い起こさせるものです。地形が横顔の輪郭のような形をなしています。人間の頭部の断層写真のようにも見えます。作られた方は、顔や頭の形の類似性は特に意識しておられなかったようです。

また、箱庭に置かれるフィギュアの眼差しも、注目に値します。これは男の子の作品です。サングラスの男性が警官に対峙しています。こんなふうに、箱庭世界のなかで視線が交わされることもあります。

・箱庭におけるチューニング (Attunement)：

ここまで、箱庭と仮面の類似性に基づいてお話してきましたが、もちろん大きな違いもあります。いまからそこに焦点を当てたいと思います。最も大きな、そして重要な違いは、箱庭はアイテムを置き直したり地形に手を加えたりする余地が大きく残っていて、可変的であるということです。仮面の方は、一度作られるとずっとその姿を変えずにいます。

文楽の人形遣いは、人形の表情に同調した表情を自然と見せています。藪医者の人形を遣っているところてす（文楽の人形遣い・吉田蓑助氏の写真）。吉田蓑助氏は、人形の顔や姿勢を注意深く見えています。彼の表情は、人形の顔と同調しているように見えます。

こちらは中年女性を遣っている写真です（お

千代を遣う吉田蓑助氏)。この写真は、箱庭のメタファー的表象としてご覧いただきたくて出しました。この人形のように、箱庭は目に見える、物体として制作されます。このシーンにおける目に見えない要因、すなわち人形遣いは、箱庭（人形）を制御し、支えています。箱庭作品と見えない要因という、両者の血の通った相互作用が、箱庭に生命を与えるのです。

この状況を完全に理解するためには、目に見える物体を注意深く観察し、それから、可視的な水準を超えて、その向こうを見通さねばなりません。そうすれば、人形遣いの姿が見えてきます。このようにして、もっと深い奥にある、ありうる意味や情動や想像といった、様々な層をも探究していけるのです。

夢や、描画や、詩のような、イマジネーションによる心理的表現と同じく、箱庭表現にも、ありうる意味の多様な層が存在しています。経験豊かな箱庭療法家は、箱庭の外見と、その向こうにあるものの両方を見ようとする態度をお持ちのようです。もちろん、どちらも現実ですし、重要なのです。

以上述べたように、「仮面」というモチーフはこの複雑な表現を理解する上で、とても役に立つものです。

最後に、本学会を主催されたイタリア箱庭療法学会（Associazione Italiana per la Sandplay Therapy）の皆様にあらためて感謝を申し上げます。

参考文献

青木信二（2001）『吉田蓑助写真集』淡交社